

虫 古典的幻想

ささやく如く虫が鳴く
病に冒された叫びをたしなめるように
擦り傷のひりひりとした痛みにも似て
傍らにただ寄り添って虫が鳴く

胸の奥深く沈んでいる妖艶な女が
無という名の不変の幸福 否、生活を
神秘的な空間として具現するその声に
耳をふさぎ、呻き、喉をかきむしる

操られるように病人は腕を上げて草むらを探り
親指と人差指で虫をそっとつまみあげ
しばらく呆けた眼差しを虫の複眼におくったあと
あくまで等速の圧縮機械のように冷たく潰した

もはや野には一匹の虫もなく、それに代わって
病人のすすり泣きだけが染み渡ってゆく
ささやく如く、何かをたしなめるように
そしてまた、あたりの空間を閉ざすように

そのすすり泣きに耳を澄ますときに聞き分けられなかったか
何か妖しげな女の高笑いらしきものを

(1982.12.5)